

【表紙解説】 ライムンドゥス・ルルス「学問の樹」(1535年)

Ramon Llull, *Arbor Scientiae* (Tree of Science / Arbre de la ciència), 1535(1296)

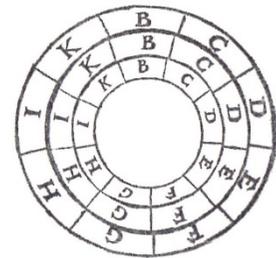
情報をマッピングし可視化する手法は、思考や記憶のための方法として教育の場でも用いられている。これらの祖とされるのが、本号の表紙にあるライムンドゥス・ルルス (Ramon Llull, 1232/33-1315/16) の「学問の樹」である。

カタルーニャ名でラモン・リュイと表記されることもあるルルスは、クザーヌス、ライプニッツや汎知主義など、後世に多大な影響を及ぼした人物である。30歳頃に啓示をうけて回心し、その後、ラテン語、自由学芸、神学などを独修したという恐るべき独学者でもある。回心による彼の固い決意の一つに「異教徒の誤謬を論駁するためのこの世で最高の書物を著す」(ルルス 1998:26) とある通り、生涯 250 以上の著作物を遺した。そのうち『学問の樹』は、全知識を有機的に統一しようとした百科全書の著作である。

記憶術の歴史を見事に描いたイエイツの『記憶術』は、一つの章がルルスのために割かれている。イエイツは、ルネサンスに大きな影響力のあったルルスの最も有名な図として、「小さき術」を挙げている(図参照)。そこに記された円を切り離してクルクルと回せば、多様な組み合わせが完成する。9つのアルファベットは、万物の根本原因となる絶対的原理<善性、偉大性、永遠性、力、知恵、意志、徳目、真理、栄光>を示す記号である。同じく9つの相対的原理<差異・合致・対立>、<始め・中間・終り>、<より大・同等・より小>と合わせた18の原理こそが、「学問の樹」の根なのである。枝は元素、植物、人間など16の学問分野を象徴している。

これらの挿絵は、二次元で描かれた動画のようなものである。同様にルルスの思想もまた、「動き」を前提としている。それは、彼が人生を捧げた「神への愛」に向かう人間の変化である。すべての術はそのためののみ存在し、すべての教育がそれにより存在意義を与えられる。

ルルス後の系統樹では、枝葉ばかりが目されるようになり、その根が描かれることは極めて稀である。何によって系統立てられるのか…ルルスの思想ではその根っこに当たる原理は明らかだ。太く力強い根(原理)から枝(学問)への動き。そして、その樹の下には教える者と教わる者。「学問の樹」もまた、一つの教育の図なのである。



図：ルルス「小さき術」
Frances A. Yates, *The Art of Memory*, The University of Chicago Press, 1966, p.183.

【出典】 Google eBooks website ※2013年1月より、1535年版がここで入手可能である
URL: <http://books.google.co.jp/books?id=I64oL87aiS0C> (accessed 2013-11-16)

【引用参考文献】

- ・ 三中信宏『系統樹思考の世界』講談社、2006年
- ・ フランセス・A・イエイツ(玉泉八州男監訳)『記憶術』水声社、1993年
- ・ マニユエル・リマ(久保田晃弘監修/奥いずみ訳)『ビジュアル・コンプレキシティ：情報パターンのマッピング』ビー・エヌ・エヌ新社、2012年(Manuel Lima, *Visual Complexity: Mapping Patterns of Information*, Princeton Architectural Press, 2011)
- ・ ライムンドゥス・ルルス(西澤龍生/野村銃一訳)「愛する者と愛された者について」上智大学中世思想研究所編『後期スコラ学』(中世思想原典集成18)、平凡社、1998年、25-100頁(引用箇所は野村銃一「解説」より)
- ・ ラファエル・ロペス・シロニス「ルルスの思想と近代」上智大学中世思想研究所編『中世と近世のあいだ』(中世研究12)、知泉書館、2007年、25-54頁

(文責：荒川麻里)